明日の淡海

VOL. 31
2020.07

－自然と人との共生をめざして－

公益財団法人 淡海環境保全財団

表紙写真：早崎内湖ビオトープのハス

「ラムサールびわっこ大使」からのメッセージ

びわ湖のすばらしさを見つけよう、そしてびわ湖の大切さをもっと伝えよう！

滋賀の未来を担う子どもたちを次世代の環境活動リーダーとして育成する目的で、
県内の小学生が「ラムサールびわっこ大使」として国内外で交流しています。
財団では、この大使たちの活動を支える事業を行いました。

滋賀のすばらしさをPRする「ラムサールびわっこ大使」

「ラムサールびわっこ大使」は、2008年（平成20年）に韓国で開催された「ラムサール条約締約国会議」に「こども環境特派員」として参加したのを契機に始められました。

びわっこ大使たちは、海外や、県外の子どもたちと交流し、びわ湖の自然のすばらしさを伝え、その良さや大切さを知ってもらうこと、また学んだことを滋賀県の子どもたちに伝えることを、その役割として担ってきました。これまで、「世界湖沼会議」「ESD・KODOMOラムサール」「ラムサール国際湿地交流」など、多くの環境分野の国際交流の場へ派遣され、活躍しています。

1年間の学びと、その成果を大きな舞台で発表する場面を経験する中で、広い視野で人と自然を考え、びわ湖を取りまく環境を守り伝えるために具体的に行動し、活動を広げていくことができる子どもの育成につながっています。

はばたく「ラムサールびわっこ大使」たち

これまでのびわっこ大使経験者は、計57名。OB、OGたちが、それぞれの道で活発に活動しています。

小学校の先生として環境教育に関わっている人、ユースラムサールジャパンに参加して湿地についての学習交流会等の活動を行う人、「琵琶湖システム」が世界農業遺産に登録されることを目指して、ふなずしやなれずし等の県の伝統料理などの魅力を発信している人などもおり、地域や社会で、多様な進路を歩み始めています。

事業開始から10年余りを経て、次世代を担う人材の育成にもなっていることが見えてきています。

令和元年度は8名が選任され、「びわ湖の湖魚食文化を学ぶ－湖魚料理に挑戦－」を学習テーマに、学習や活動をしました。次ページにそのようすを紹介します。

Index

1-2　表紙特集　「ラムサールびわっこ大使」からのメッセージ
2　募集　令和２年度びわっこ大使
3　その人に聞く　滋賀大学名誉教授　川嶋 宗継さん
4　日本ヨシ紀行～ヨシの風景を訪ねて～　福岡県久留米市
5　おうちで動画を見ませんか　／CO_2ネットゼロ賛同
　滋賀県地球温暖化防止活動推進員リレートーク　宮原 東作さん
6　おしらせ・募集
　クールチョイスポスター／スマート・エコハウス補助金　ほか

6月の第1回学習会では、エリ漁を体験しました。
びわ湖にはたくさんの魞(エリ)が仕掛けられています。
魚の習性を利用して、魚を獲りすぎないように考えられた方法で、昔の漁師さんの知恵がすごいと思いました。

コアユやワカサギなど、たくさんの魚と一緒に、外来魚も入っていました。

7月の第2回学習会では、東近江市で日本農業遺産の「魚のゆりかご水田」や日本遺産の「伊庭(いば)の水郷」を見学しました。びわ湖からニゴロブナやナマズなどがやって来て卵を産むことができるような水田の工夫がすごいと思いました。

滋賀県の伝統料理「ふなずし」漬けにも挑戦しました。

9月の第3回学習会では、ビワマスを使った「アメノイオご飯」作りに挑戦しました。海のサケと同じように、川で生まれたビワマスの稚魚はびわ湖で成長し、また生まれた川に帰ってきて卵を産みます。この炊き込みご飯がアメノイオご飯で、滋賀県の無形民俗文化財に指定されています。

おいしいビワマスが住めるびわ湖の環境を守っていきたいです。

OB・OG10名との世代間交流会や、大阪ATCこどもエコクラブ交流会でも、学びや発表の機会を重ねました。

11月には2泊3日で宮城県南三陸町に派遣され、びわ湖について発表し、交流してきました。東日本大震災からの復興の中で、森と海のつながりを大切にしたすばらしい取り組みや、さらに志津川湾が一昨年10月にラムサール条約に登録されたことを知りました。

一番の思い出は、地元のエコクラブ「南三陸少年少女自然調査隊」との活動です。地元の漁業組合のご協力で、この時期に海から上がってくるシロザケをつかみ捕りしました。それから海と川で獲れたシロザケとびわ湖から持参したビワマスを調理して食べくらべをしました。

大使たちの声

- 森林の働きがたくさんあることが学べた
- 同じサケの仲間でも観察すると全然違った
- 林業や漁業に携わる人々が震災に負けずに頑張っていることを知ることができた
- 南三陸町のみんなとこんなに仲良くなれると思わなかった

【びわっこ大使からのメッセージ】

滋賀県にはびわ湖のエリ漁、魚のゆりかご水田、ビワマスやニゴロブナの伝統料理など、自慢がいっぱいあります。
「世界農業遺産」に認定されたらいいなと思いました。

「びわ湖のすばらしさを見つけよう、そしてびわ湖の大切さをもっと伝えよう！」

3月に予定していた報告会は新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期となり、令和元年度のラムサールびわっこ大使の活動は終了しました。
大使たちが、環境保全のリーダーとして次の世代を牽引してくれることを期待しています。

令和2年度 びわっこ大使 募集中！

「ラムサールびわっこ大使」を募集しています。対象は県内在住の小学5・6年生。定員8人。
応募は、所定の用紙に必要事項を記入し、環境活動を行っている写真と、環境に関する作文（800字程度）を添付し、7月20日（月）までに〒520-8577 大津市京町4丁目1-1、滋賀県自然環境保全課（TEL：077-528-3483）へ。

自然と人との共生をめざして

その人に聞く

滋賀大学名誉教授 川嶋 宗継 さん

環境科学・教育と環境保全を主軸に、教員を目ざす数多くの大学生の指導をされる傍ら、30年の長きにわたり、県や市町の環境政策の推進に携わってこられた川嶋先生。また、体験を伴う学習、特に子どもの頃の自然体験の重要性を説き、教育と水環境をかけ合わせた学びの現場で、国内外の子どもたちと共に過ごしてこられました。当財団でも、ラムサールびわっこ大使（今号表紙特集）や環境学習の推進などの様々な場面で、多くのご指導をいただいてきました。

子どもたちや自然への深い思いを、満面の笑顔で語られる川嶋先生に、びわ湖岸でお話を伺いました。

―ラムサールびわっこ大使事業では、2008年の開始時からずっとお世話になっています。

川嶋さん　環境の良さというものを感じて初めて、その環境を大事にしようという気持ちが芽生えるのだと思います。自然の中、水辺で遊ぶ子どもの姿が見られなくなりました。「絶滅危惧種『カワガキ』」です。

絶滅危惧種「カワガキ」

自然体験が乏しい親世代には、子どもの自然体験の支援を期待できそうにないので、私は仲間と一緒に学校教育や課外活動など様々な所で、子どもたちが自然の中で楽しく過ごし、自然に心を動かされ、その大事さに気づく場を作るように努めてきました。

びわっこ大使は、体験してびわ湖の良さを伝えると同時に、びわ湖に価値を見い出す活動として、県民の皆さんにもぜひ知って欲しいプログラムです。

―まさに将来世代の環境リーダー育成につながっているのですね。

川嶋さん　そうです。びわっこ大使のOB、OGの多くは環境に関わる分野に進んでいます。さらに、指導する先生たちも広がっていて、びわっこ大使を指導した経験は、学校教育における環境活動に大いに生かされていると思います。成果を感じ、やってきてよかったと思っています。

―先生はかつてびわ湖の力を生かし、「どこでもすくって飲める水」の再来を目ざそうと言っておられましたが。

川嶋さん　はい。滋賀大学教育学部の65%が県外出身で、びわ湖を知らない学生が多くいます。それで、必修科目の中に、びわ湖乗船の体験学習プログラムを入れました。その中に、科学的調査に加えて、北湖の深層水を飲むという活動を入れましたが、おいしい水を飲んだとき、びわ湖水は汚いと教えられてきた学生たちの価値感が一変します。飲める水を保ってきたびわ湖の力を感じてくれます。「どこでもすくって飲める水」の再来を目指したいですね。

―タイとも深い関わりをお持ちですが、現地の研究者から「カワシマポイント」と呼ばれている場所があるのだそうですね。

滋賀大学名誉教授・川嶋先生

川嶋さん　20年以上にわたって、タイ北部のチェンマイの環境に関わってきました。汚濁で真っ黒な運河が町の中心を流れていますが、透明な水を見たことのない人にとってこれが通常の水の状態です。汚濁した黒い水が、チェンマイの母と呼ばれるピン川に合流する一番水環境が悪い地点が、いつの頃からか『カワシマポイント』と呼ばれるようになりました。ここを良くすることが町全体の環境改善につながると強調してきた場所で、多くの研究仲間や学生・市民・子どもたちに理解され市民活動にもつながりました。

タイの子どもたちと

―最後に、これからを担う先生たちや、子どもたちに期待することを教えてください。

川嶋さん　若い人にできるだけ自然体験をして欲しいです。受験勉強も大変ですが、テレビやゲームの時間を減らして、外へ出て欲しい。それにはいろいろな方のサポートが不可欠です。学校の先生には、先生自身が自然を楽しみ、その感動を伝える役割を、行政はそのサポートや場を作る役割を果たしていただきたいです。教科優先で自然体験の時間が減っているのは心配ですが、先生方の頑張りに期待したいと思います。びわ湖や集水域に、「カワガキ」が復活して、生息数が多くみられるようになると嬉しいですね。

―びわっこ大使事業には、顧問としてアドバイスを頂けるとのこと、ありがとうございます。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

日本ヨシ紀行

ヨシの風景を訪ねて

第５回　筑後川（ちくごがわ）
（福岡県久留米市）

筑後川は、熊本・大分・福岡・佐賀の４県を流れる九州最大の大河です。筑後川にも、豊かなヨシ原がありますが、地元に古くからヨシとエツという魚の昔話が残っています。

「えつとぼうさま」（要旨）

むかし筑後川のほとりに、貧しい川魚取りの若者が住んでいました。ある夕暮れ時、川辺に、ひとりの坊様がしょんぼりと腰を下ろしていました。四国の生まれだといった坊様は、「今日中に、向こうの岸まで着きたいが、お金がない」といいました。「坊様、おいが向こう岸までお送りしますたい」親切にも向こう岸まで渡してあげました。唐の国で修行して、日本に着いたばかりの若い坊様は感激し、御礼を言った後、筑後川のヨシの葉を水に投げ入れました。葉は見たこともない見事な魚に変わりました。坊様は、「エツという魚で、来年の今頃多くの魚が川をのぼってくるだろう」といい、去っていきました。

城島町企画開発課　編
葦書房　平成5年

筑後川のヨシ原

六五郎橋付近のヨシ原の刈り跡火入れ

筑後川は、利根川の「坂東太郎」や吉野川の「四国三郎」などと同様に、「筑紫次郎」と呼ばれ、日本の代表的な暴れ川のひとつともなっています。

また汽水域には、有明海流入河川特有のアリアケシラウオ、エツ等が群れ、河口付近の干潟には、ムツゴロウ、ハラグクレチゴガニ等が生息・繁殖し、それらを餌とするシギ類等の水鳥が訪れています。ヨシ原には、オオヨシキリが渡り、哺乳類ではカヤネズミも生息しています。

有明海を代表する魚「エツ」は地元では６月末～７月初めだけ、産卵のため有明海の河川に遡上し、特に筑後川にはかなりの数が上がってくるとのことです。筑後川のヨシの葉から生まれたという伝説をもつエツはまさに筑後川を代表する魚です。ところがこのエツは早く腐ってしまうので、遠い地域への流通ができず、この付近でのみ、名物の季節料理として、刺身、天ぷら等になって食されています。

取材時には、エツのマリネをいただきました。こうすると若干日持ちするようです。筑後川のヨシの葉があしらわれ、初夏の時節や有明海の豊かさを感じる料理となっています。弘法大師ともいわれるお坊さんの遺産は、今も地域に恵みをもたらしているようです。

ヨシの葉をあしらった郷土料理「エツのマリネ」

取材・協力：江上和子（川辺りの会）
参考：国土交通省九州整備局筑後川河川事務所HP
http://www.qsr.mlit.go.jp/chikugo/

おうちで動画を見ませんか―インターネットで配信中！

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、できるだけご自宅で過ごされているという皆さまへ、ぜひこの機会にご覧いただきたい滋賀県の動画をご案内します。
また、今後、滋賀県地球温暖化防止活動推進センターでも積極的に動画で発信します。
どうぞご注目、ご期待ください。

NEW!
◆「気候変動でどうなる―滋賀での私たちの暮らし―」

近年、大型台風や竜巻、記録的な高温など、異常気象が全国各地で相次いでいます。
このまま地球温暖化が進むと、滋賀での暮らしや自然環境はどう変わっていくのでしょうか。
今後起こり得る影響やリスクに対応する「適応策」の取り組みをまとめた動画ができました。
ぜひご覧いただき、今、私たちができることを考えてみましょう。

滋賀県　適応策　検索

検索エンジンまたは二次元コードから
動画ページにアクセスできます。

◆「しがエネルギームーブメント！ ―持続可能な社会の実現を滋賀から」

再生可能エネルギーや省エネルギーなど、持続可能な未来へとつながる挑戦が県内各地で広がっています。滋賀県では、こうした取り組みのうち滋賀での事例を全 25 回シリーズの動画「しがエネルギームーブメント！」として制作しました。持続可能な未来に向けて、今私たちができることは何か、そのヒントがきっと見つかります。

しがエネルギームーブメント　検索

検索エンジンまたは二次元コードから
動画ページにアクセスできます。

「しが CO_2 ネットゼロまちづくり」今浜自治会が宣言されました

守山市の今浜自治会が、県内の自治会に先駆けて、まちづくりの一環として地球温暖化問題を自分ごととしてとらえ、省エネ・脱 CO_2 行動が暮らしの中に定着し、これからも住民が安心して幸せに暮らせるまちづくりをめざして「しが CO_2 ネットゼロまちづくり」を宣言されました。
当財団では、地域の行事や住民の皆様の取り組みなどを、全面的にサポートして参ります。

滋賀県は 2050 年 CO_2 排出量実質ゼロを目指し取り組みを進めています
“しが CO_2 ネットゼロ”の取り組みに賛同をお願いします

← この二次元コードを読み込むと、滋賀県ホームページ（しがネット受付サービス）にアクセスできます。
アクセス先の Web 上で取り組みへの賛同が可能です。

滋賀県 地球温暖化防止活動推進員 リレートーク

滋賀県地球温暖化防止活動推進員は、地球温暖化対策の推進に関する法律に基づき、滋賀県知事より委嘱され、普及啓発活動を推進されています。
今回は、第9期から推進員になられ、大津グループの世話役を引き受けておられるこの方です!

宮原 東作さん
大津市在住

定年退職を機に環境に関連したことをやってみたいと思っていたところ、地球の温暖化によって大変なことになってくることを知り、温暖化防止活動推進員になりました。現在の活動は主にイベントでの啓発や小・中学校、公民館等で出前講座を実施しています。いかに伝えて気づいてもらうかがポイントです。
話し方も大事ということで、発声練習を兼ねて“ポップスの会”に入って歌っています。効果が出ると良いのですが?
また教材開発チームでの教材づくりで、びわ湖と温暖化の関わりについても知りました。
温暖化も生態系も社会生活も全てつながっているというスタンスで、多くの人に温暖化防止についてわかりやすく説明出来たらと思っています。

中学校で講座を行う宮原さん

COOL CHOICE のポスター募集中!!

応募締切
9月15日(火)

これ以上地球温暖化が進まないよう、暮らしの中で行う「COOL CHOICE（=賢い選択)」のポスターを、児童生徒の皆さんを対象に募集します。

- 最優秀賞「滋賀県知事賞」
  （副賞：5,000円の図書券・5,000円相当の賞品）
- 特別賞「京セラ賞」「東京センチュリー賞」
  「滋賀県地球温暖化防止活動推進センター長賞」
  （副賞：3,000円の図書券・3,000円相当の賞品）

募集要領など、詳しくは財団ホームページでご確認ください。

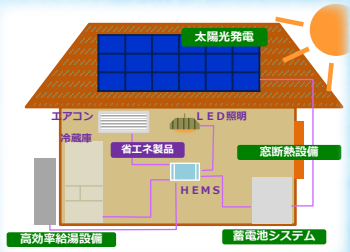
受賞作品を使用して
カレンダーを作成します。

昨年度の最優秀賞
滋賀県知事賞　受賞作品

令和2年度 スマート・エコハウス普及促進事業補助金の募集を行っています

家庭においてエネルギーを**「減らす」「創る」「賢く使う」**取り組みを総合的に広めるため、個人の既築住宅において、**スマート・エコ製品**を設置する場合、経費の一部を補助しています。

補助制度の詳細、申請様式は当財団ホームページよりご覧ください。
https://www.ohmi.or.jp/ondanka/r02smart-eco/



お知らせ

ヨシ製品を販売しています

刈り取った琵琶湖のヨシを利用した様々な風合いのヨシ紙製品を多数取り揃えています。また、特にキク作りに適したヨシ腐葉土や、水辺の緑化と景観づくりに優れたヨシ苗の育成販売をしています。

マンホールカードを配布しています
（淡海環境プラザ）

滋賀県のマンホールカードを配布しています。

また、滋賀県と各市町（合併前の市町村を含む）のデザインマンホールを展示していますので、
ぜひご来館ください。

平日9時00分
～16時30分まで
（淡海環境プラザの休館日を除く）

「COOL CHOICE」にご賛同ください

温暖化の進行を防ぐためには、1人ひとりが日常の生活を見直していくことが必要です。COOL CHOICE(=賢い選択)は、地球温暖化防止につながる行動などを賢く選んでいこうという運動です。

賛助会員を募集しています

財団の事業活動にご賛同、
ご支援をいただける賛助会員を募っています。
【会費】個人会員 1口 1,000 円 ／年
　　団体会員 1口 10,000 円 ／年
【会員特典】広報誌「明日の淡海」のご送付、メールマガジンによるイベント情報等ご案内、財団販売のヨシ製品を2割引でご購入（個人会員のみ）
※詳しくは財団 HP をご覧ください。

公益財団法人 淡海環境保全財団

「明日の淡海」
VOL.31　2020年7月発行
（年4回発行）

発行 公益財団法人 淡海環境保全財団
〒525-0066　滋賀県草津市矢橋町2108番地
TEL：077-569-5301　FAX：077-569-5304　E-mail：info@ohmi.or.jp
【滋賀県地球温暖化防止活動推進センター】
TEL：077-569-5301　FAX ：077-569-5304　E-mail ： ondanka@ohmi.or.jp
【淡海環境プラザ】
TEL：077-569-5306　FAX ：077-569-5334　E-mail ： plaza@ohmi.or.jp

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C017322
●用紙：適切に管理された森林の木材を利用したFSC®認証用紙
●インキ：環境配慮型インキ（植物油インキ or ノンVOCインキ）
●印刷：有害な廃液を排出しない水なし印刷

編集後記 発行直前に、「日本ヨシ紀行」で紹介した筑後川の氾濫発生のニュースが飛び込んできました。何度も通った美しい風景と、皆さんの親切な笑顔を思い浮かべ、一日も早く平穏な生活が取り戻せるよう心より願います。